

---

# ブリーチ～もう一人の死神代行～

狂華乱草

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブリーチ〜もう一人の死神代行〜

### 【Nコード】

N0736Z

### 【作者名】

狂華乱草

### 【あらすじ】

ブリーチ

〜もう一人の死神代行〜

## プロローグ(前書き)

オリキャラ

黒崎紫苑

一護の姉

髪 シルバー

瞳 ブルー

身長 169センチ

一護より先に

死神代行になった

隊長格に匹敵する霊圧

斬ぱく刀 彼岸花

解号 咲き乱れよ 彼岸花

弟妹思い 仲間思い

自分を犠牲にする癖がある

毒舌 ちよつとS



プロローグ

これは

黒崎一護の姉

黒崎紫苑の物語

黒崎紫苑

髪の色 / シルバー

瞳の色 / ブルー

職業 / 高校生

兼

死神代行

朝

朝食が出来

兄を呼ぶ妹

黒崎遊子

「お兄ちゃん！

ご飯できたよー！」

「わかった、今いく！」

兄

黒崎一護は

階段を下りて

いつもの席に着く

「おはよう、一護」

「おはよう、一兄」

隣は、姉、

黒崎紫苑の姿があつた

紫苑の前には

もう一人の妹

黒崎花梨

「おう。おはよう姉貴  
花梨」

朝食をすませ

学校に向かう 紫苑と一護

途中ケイゴと水色と

合流し

一緒に登校する

学校に着き

一護らと紫苑は

わかれそれぞれ

教室に向かう

「はあ…退屈だわ」

紫苑は高校首席  
生徒会長に風紀委員長も  
勤めている

勉強など退屈で仕方ない

運動神経抜群で  
おまけに美人

地域でも有名な人だ

「 …… 」

ああ…  
授業の話が…  
子守歌のようだ…

紫苑は深い眠りにつく



斬ぱく刀

⋮

⋮

⋮

⋮

⋮

⋮

⋮

⋮

だれ…

この…声は…？

ああ……

心地いいな……

「我の名を……呼べ……」

名………？

「そつだ…我の名だ…」

お前は…

彼岸花

お前は……！

彼岸花！

「我は……彼岸花……  
主の……盾であり……矛だ」

咲き乱れよ 彼岸花…

「黒崎！…！」

「あ……？ん」

「寝てるな！授業聴け」

「…すみません」

ああ  
寝すぎたな…

はあ…また退屈だ

早く終わらんか…

キーンコーンカーンコーン

「終わった……」

早く支度をすませ

一護を迎えに行く

私の中で

「……彼岸花……か」

雫が落ちた音がした

赤い 花びらと共に……

「あつ 姉貴！」

：

ふっ

私は何故

弟をみると

こんなに安心するのだろうか

自然に ほころぶ…

「帰るか…一護」

「おじ」

いつもの帰路

私の

好きな時間

死神代行と一護

夜

シュンッ シュンッ

トッ

「この辺か」

銀髪の髪をなびかせ

電柱の上で呟く

オオオオオオ!

来た:  
虚

シュンツ                      ズパアアツ

仮面を一刀両断し

一撃で倒す

「ふう」

彼岸花の  
始解をしたいが  
雑魚の虚で試せる代物では  
ないらしいな

赤く煌めく紅刀

柄は赤と黒色の布に巻かれ  
鐔は彼岸花のように開き  
刃は自身の頭身を越す

「美しく気味悪い刀だな」

> そついな  
我が望んだ姿ではない<

「すまん」

> いや主が  
謝ることではない<

「ありがとう」

> 礼には及ばん<

そんなような

話をしていた矢先

「…っ!!」

自宅付近で虚の

霊圧を感じた

「しまった…一護!!」

紫苑は

一護が高い霊圧

持っていることを

知っている

妹たちも譲りを受けて

霊圧が高いのも

知っている

自宅が虚に襲われる

そんなことは

百も承知でした

自分で護ると誓ったから

急いで自ぎに

帰ると……………

妹たちが

倒れていた

父、一心は

怪我をしていた

一護は…

死神と化していた

「…な…そんな…！」

紫苑は

一番起こってほしくない

状況を目にした

一護が………死神

一護は

とても優しい子だ

母親がいない黒崎家は

家事は遊子が

やるものの

存在的には紫苑が

母親のような

立ち位置にいた

そのような立ち位置

ではなくとも

一護は優しい子だと

誰もか思う

だからこそ

死神には

なつてほしくなかった

一護が死ぬかも

しれないから…

「一護…なぜ…」

一輪の花は

悲しんだ

泣いた

静かに

一つの花びらが

舞い落ちた

紫苑の心が

欠け落ちたとでも

いつかいつか...

## 紫苑のなみだ

朝

虚のせいで

壊された家を直していた

黒崎一家

そこに紫苑の姿はない

遊子曰わく

学校に用があるらしく

早く登校したとのことだ

紫苑は人一倍

家族思いなのを

知っている一護は

不思議でならなかった

姉貴、どうしたんだ

その頃紫苑は

浦原商店にいた

「どうしたんすかあ？

紫苑サン

来て早々部屋にこもって」

「ほっといてくれ

今は誰とも話したくない」

「…紫苑サン」

一室の和室の隅で  
体育座りをして  
顔を伏せている紫苑

浦原は眉を八の字に  
曲げて困り顔をしている

数時間がたち  
学校の下校時刻

一護は 焦っていた

「姉貴…

どこいったんだよ！」

紫苑の教室に迎えに行くが  
紫苑の担任から  
欠席していると聞いたのだ

紫苑が居そうな場所を  
探し走っていた

ひとつの不安がよぎる

虚に襲われてるんじゃない……

と

紫苑に限ってそんなことはないのだが何も知らない  
一護が知る由もなく  
不安が渦巻いていた

紫苑を探して数十分

川沿いに紫苑の姿があった

「…姉貴！」

紫苑の近くに寄っていく

「…!!!?!」

紫苑は

泣いていた

透明で清らかな涙が  
色白な紫苑の頬に  
一粒ずつ流れていく

「…姉貴？  
どうしたんだよ…？」

「…」  
「護…」

ぼろぼろ

溢れるように零れる涙

そつと紫苑を

抱きしめる一護

「…落ち着くまで…」

「じじしてるから…」

それを聞いた紫苑は

意識を手放した

「おっと…姉貴？」

スヤスヤ寝息をたてて  
眠っていた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0736z/>

---

ブリーチ～もう一人の死神代行～

2012年1月6日22時49分発行